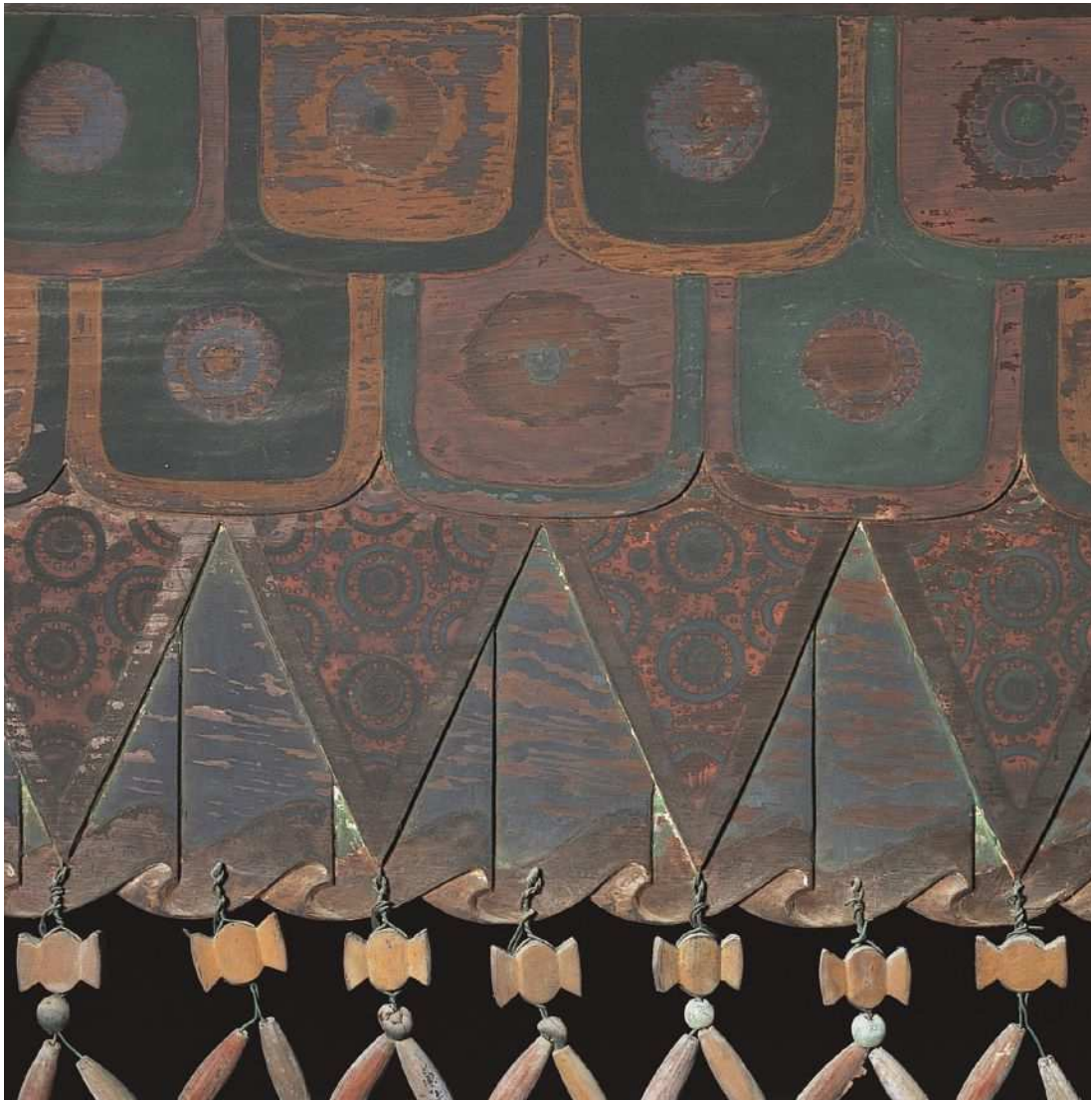


Nara National Museum

# 奈良国立博物館 だより

第60号

平成19年 1・2・3月



重要文化財 木造天蓋（金堂西の間所用 部分）法隆寺 〈平常展「仏教美術の名品」より〉

特別陳列

おん祭と  
春日信仰の美術

～1月21日(日)  
東新館

特別陳列

お水取り

2月10日(土)～3月18日(日)  
東新館

平常展

仏教美術の名品  
〈彫刻〉

中国古代青銅器

本館

特別陳列

# おん祭と 春日信仰の美術

平成18年12月9日(土)～平成19年1月21日(日)  
東新館

奈良の歳末を彩る伝統行事、春日若宮おん祭は、平安時代に始まったとされ、例年12月17日に執り行われます。この展覧会では、若宮神やおん祭に関わる美術工芸品・歴史資料によって、祭の一端に触れていただきます。

またあわせて、舍利や地藏菩薩など、神仏習合を示す品々を通して、春日信仰の広がりや多様さが感じられるよう構成しています。



◎舞楽面〈地久〉(春日大社)



◎春日龍珠箱(奈良国立博物館)



春日鹿曼荼羅(西城戸町)



◎光背〈二月堂本尊所用〉(東大寺)



香水壺(東大寺)

東大寺二月堂の「お水取り」は、正しくは修二会といひ、十一面観音に悔過をする行法です。悔過とは、過ちを懺悔して除災招福を祈ること。「お水取り」は奈良時代から一度の中断もなく続けられており、今年は千二百五十六回目にあたっています。奈良に春を呼ぶ「お水取り」がおこなわれる時期にあわせ、「お水取り」に関連のある絵画・典籍文書・工芸品などを展示し、あわせて二月堂の内陣の様子を再現します。

## お水取り

特別陳列

2月10日(土)～  
3月18日(日)  
東新館



◎新入心精進之事(東大寺)



◎二月堂縁起(東大寺)



◎二月堂練行衆盤(東大寺)



平常展

# 仏教美術の名品〈彫刻〉

本館

## 法隆寺の「天蓋」

本館第3室「仏の莊嚴」の展示に、法隆寺金堂西の間に掲げられ、仏の頭上を飾ってきた「木造天蓋」（重要文化財）が加わりました。以前から展示していた同じ西の間の「阿弥陀如来像台座」（重要文化財）とあわせて、飛鳥時代の仏像の莊嚴の様子が二層よくわかることでしょう。



## 金峯山寺の「釈迦如来立像」

1月16日（火）～2月25日（日） 本館第1室  
木造彩色 像高一一・二cm  
鎌倉時代（十三世紀）



もと吉野山の世尊寺（廃寺）の本尊。明治の神仏分離の際に金峯山寺に遷された仏像で、藏王堂（本堂）の一隅に安置されている。肉髻が低く、螺髪（らうぱつ）の粒が大きい頭部、目尻のつり上がった顔、やや内に向けた右手の構え、股間にU字形の円弧（えんこ）を幾重にも重ねる衣文表現など、中国・宋時代の彫刻の影響が強うかがわれる。京都戒光寺（かいこうじ）の釈迦如来立像（安貞二年、一二二八）の姿形に近く、制作は十三世紀半ばから後半と推定される。奈良では珍しい宋風彫刻の優品で、奈良県の指定文化財となっている。本像は頭部が六材、体幹部が八材からなる整然とした木寄せを示している。各部材の知ぎ目が緩んできたので、今回本格的な解体修理が実施された。ただし、すべてが竣工したわけではなく、本体像の修理が一段落ついた時点でのお披露目になる。光背・台座は目下修理中で、本年度末の完成を待つて本像は藏王堂に戻る予定である。このような事情を踏まえた速報展示であり、所蔵者の金峯山寺、施工者の財団法人美術院、修理監督機関の奈良県教育委員会の協力をいただき、実施の運びとなった。当館の文化財保存修理所の事業を紹介する企画でもある。

鈴木喜博（当館上席研究員）  
写真提供／奈良県教育委員会

特別展

# 神仏習合

「かみ」と「ほとけ」が織りなす信仰と美

4月7日（土）～5月27日（日）



◎山王宮曼荼羅（奈良国立博物館）



◎八幡三神像（薬師寺）

日本各地の神社にまつられる〈かみ〉に対する信仰が、仏教との融合の中で発展してきたと聞くと、意外に思う人が多いかもしれません。しかし、神社に御神体としてまつられる神像や、神社の景色を描く宮曼荼羅、神道の理論書などは、いずれも古代から中世にかけて仏教との関わりの中で創り出されたものなのです。長らく日本の宗教史を豊かに彩ってきた、こうした〈かみ〉と〈ほとけ〉が密接に結びついた信仰のあり方は、今日一般的に「神仏習合」と呼ばれています。本展では、「神仏習合」によって生み出された絵画、彫刻などの名品を一堂に会し、その信仰と美の変遷を広く紹介します。

予告

# 「お水取り」の創始者

実忠<sup>じつちゅう</sup>

東大寺二月堂の「お水取り」(修二会<sup>しゆにえ</sup>)は、十一面観音に悔過<sup>けくわ</sup>をする法会で、天平勝宝四年(七五二)に実忠和尚が初めて執りおこなつて以来、現在まで一度の中断もなく続いているとされる。

この行事を創始した実忠は奈良時代末〜平安時代初の東大寺僧で、数々の事績を残している。しかし、「お水取り」以外の事績については、あまり広く知られていないのではないだろうか。例えば、当館から五百メートルほど南下した場所にある「頭塔」(七段築成の土盛りの仏塔。写真1・2)の造立は実忠によつてなされたし、創建当初の東大寺大仏の光背を完成させたのも彼であった。

実忠は、東大寺僧の最高位である別当<sup>べつとう</sup>には至らなかった。そのためか、当時の公的な記録にはあまりその名が現れず、彼の事績を物語るほとんど唯一の史料となつてのが、『東大寺要録<sup>とうだいじようりく</sup>』に収められた「実忠二十九箇条」である(写真3)。弘仁六年(八一五)四月二十五日の日付を持つこの文書は、実忠の自叙伝とでも称すべきもので、東大寺における自らの功績を簡条書で記している。その内容の一部を以下に紹介したい。

実忠が最初に取り組んだのは、あまりに巨大なため技術者たちが匙を投げた大仏

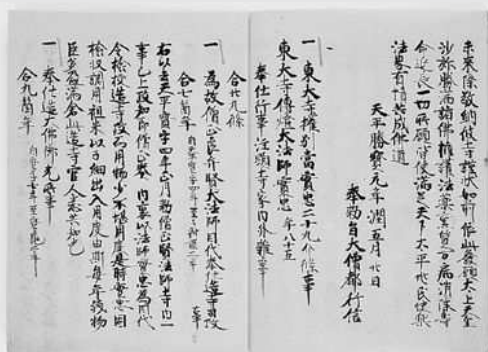


1



2

の光背の造作で、九年の歳月をかけ高さ十一丈(約三三メートル)の光背を完成させた。ところが、大仏殿の天井は大仏本体の高さに合わせてあったため、それより高い光背は大仏殿に入ることができなかった。仏師・大工たちは光背を切り縮めて入れようとしたが、光背が醜い姿となるのを嫌つた実忠は、大仏殿の天井を一丈切り上げ



3

ることを主張し、反対を押し切つて実現したという。プロの仏師や大工がこのような無計画ぶりを示すとは考えがたく、事実かどうかは疑問であるが、ともかく実忠自身の主張は以上のとおりである。

実忠にはさらに困難が襲いかかる。今度は、光背をやつと収めた大仏殿の庇<sup>ひし</sup>に歪みが生じ、柱の補強工事をおこなつた。これも、担当の造東大寺司長官<sup>とうだいじしちやうかん</sup>が匙を投げたため実忠にお鉢が回つてきた格好である。次は延暦二十年(八〇一)頃のこと、大仏には所々に破損が生じ左手は完全に外れていた。僧侶たちは対策を議論していたが、机上の空論で埒<sup>らち</sup>が明かないと判断した実忠は、自ら工匠を率いて左手の模型(試作品)を作成したという。

ここまで記すと、実忠は工匠の統領ではないかと思えてくるが、彼はあくまで僧侶であった。華嚴供の大学頭<sup>だいがくとう</sup>を務め、半月読経には五十二年間も参加し、涅槃会<sup>ねはんかい</sup>には六十二年間、十一面悔過(「お水取り」)に至つては七十年間にわたり奉仕したという。他に天智天皇ゆかりの近江国崇福寺で読経悔過をおこない、毎年十二月の朝廷での悔過に参加するなど、天皇周辺での活動も知られる。

この史料を根拠に、彼には技術的な能力があつたとか、工匠集団を率いていたなどの見方もある。しかし、やはり彼の本質は僧侶であつて、当面、次のような人物像を描いておくのが穏当ではないだろうか。すなわち、実忠は、困難ではあるけれども誰かが為さねばならぬことに、率先して取り組む「行動力」の人であつたと。実は、彼自身、二十九箇条を列挙した後に続く「あとがき」のなかで、この世に生を受けたならば自分の務めを果たさなければならず、この身があるのに行動を起こさなければ後世の笑ひ者になるだろう、という意味のことを述べているのである。

野尻忠(当館学芸課研究員)

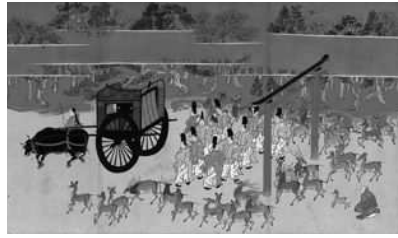




鬼面文鬼瓦 東大寺



銅三鈷鏡(堂司鈴) 東大寺 二月堂曼荼羅 東大寺



春日権現験記絵巻 第十二巻 春日大社



神鹿(春日神鹿舎利厨子より) 当館

## 特別陳列

### おん祭と春日信仰の美術

1月21日 東新館

#### 1「若宮誕生」

中臣祐賢春日御社縁起注進文(文永六年)、中臣祐賢春日御社縁起注進文(文永十一年)(以上、春日大社)、鹿島立神影図、春日文殊曼荼羅(以上、当館)、春日赤童子像(植槻八幡神社)、文殊菩薩鏡像(個人)、古社記断簡、春夜神記(以上、春日大社)、春日若宮曼荼羅(個人)、春日権現験記絵巻第四巻(春日大社)

#### 2「若宮様のおん祭」

●舞楽面(地久)、地久甲、舞楽面(陵王)、●舞楽面(納曾利)、納曾利補襦、納曾利袴(銀帶、舞楽面(散手)、散手補襦、散手袴、散手甲、●舞楽面(貴徳鯉口)、舞楽面(抜頭)、春日社年中行事、春日若宮御祭礼絵巻、春日祭図(以上、春日大社)、春日若宮御祭礼図屏風(奈良県立美術館、競馬図屏風、千切台(模造)、盃台(以上、春日大社)

#### 3「春日信仰の種々相」

3-1「春日信仰と舍利信仰」  
春日神鹿舎利厨子(当館)、●五輪塔嵌装舎利厨子(不退寺)、●四方殿舎利厨子(能満院)、春日宮曼荼羅彩絵舎利厨子(個人)、鹿座仏舎利(春日大社)、●春日龍珠箱(当館)

#### 3-2「春日地蔵と春日地獄」

春日地蔵曼荼羅、●地蔵菩薩像(以上、当館)、地蔵菩薩像(春日大社)、春日社寺曼荼羅(個人)、地蔵菩薩立像(当館)、●諸尊図像(文殊菩薩騎獅像納入品のうち)(西大寺)、春日権現験記絵巻第十二巻(春日大社)

#### 3-3「春日浄土と春日曼荼羅」

春日宮曼荼羅(当館)、春日宮曼荼羅(個人)、春日社寺曼荼羅、春日社寺曼荼羅(以上、当館)

#### 3-4「春日講」

春日鹿曼荼羅(西城戸町)、春日鹿曼荼羅東九条春日講、春日講式(東大寺)、●権現講式(高山寺)、年中行司記、古文書箱(以上、東城戸町)

(展示替えのため、12月26日からの展示品を掲載しています。)

## 特別陳列

### お水取り

2月10日～3月18日 東新館

#### 「大観音と小観音」

●二月堂本尊光背、二月堂本尊天衣片(以上、東大寺)、●類秘抄(十一面卷)(当館)、●覺禪鈔(巻第四十四(十一面上)) (西南院)

#### 「修二会の創始と二月堂観音の靈験」

東大寺縁起(東大寺)、東大寺縁起(当館)、東大寺曼荼羅(個人)、二月堂曼荼羅、二月堂縁起(以上、東大寺)

#### 「不退の行法・修二会の継承」

●東大寺要録(第四・第七)、●東大寺年中行事(東大寺文書)、●二月堂修中練行衆日記(大双紙 第廿) (以上、東大寺)、紺紙銀字華嚴經(二月堂焼経)(当館)、●二月堂修中過去帳(東大寺)

#### 「練行衆とは」

●二月堂和上日記、●大導師覚悟記、●大導師加供祈句、●新入心精進之事(以上、東大寺)

#### 「練行衆の姿」

銅油差し、●銅三鈷鏡(堂司鈴)、金銅三鈷鏡(咒師鈴)、三鈷鏡(大導師鈴)、錫杖、貝鈴、法螺貝(大法螺)、法螺貝、紙衣、重衣、袴、上堂袈裟(四職用)、食堂袈裟(四職用)、上堂念珠、食堂念珠、差懸、達陀帽(以上、東大寺)

#### 「食堂の作法」

●金銅鉢、●二月堂練行衆盤、二月堂食堂机、●二月堂修中献立控(以上、東大寺)

#### 「六時の勤行と声明」

二月堂作法(秀範本)(個人)、二月堂作法(訓盛本)、東大寺龍藏院、二月堂声明(個人)、●六時の差帳、●二月堂神名帳(以上、東大寺)

#### 「礼堂と内陣」

小観音御厨子(模造)、五体板、戸帳、金銅柄香炉、宝物(以上、東大寺)、粥食器(個人)、二月堂礼堂 内陣模型

#### 「二月堂牛玉」

牛玉宝璽、朱宝印、尊勝陀羅尼板木、二月堂牛玉宝印、尊勝陀羅尼板木図(以上、東大寺)

#### 「水取り」

●香水杓、香水壺、朱漆塗担台(以上、東大寺)

#### 「二月堂あれこれ」

●俱舎三十講日記(明暦三年)、●俱舎三十講日記(延宝三年)、●俱舎三十講日記(元禄十五年)、●二月堂御修繕御礼江戸下向日記、●実忠和尚一千年遠忌法事執行記(以上、東大寺)

#### 「考古学からみた二月堂」

鬼面文鬼瓦、緑釉軒平瓦、二彩陶器、二彩水波文埴、墨書土器 銭貨(以上、東大寺)

#### 「描かれたお水取り」

修二会画帖(杉本健吉筆)(東大寺)

## ●展覧会日程●

|       | 1 月                            | 2 月                   | 3 月 |
|-------|--------------------------------|-----------------------|-----|
| 本 館   | 平常展 仏教美術の名品(彫刻)・中国古代青銅器 (1/2～) |                       |     |
| 東 新 館 | 特別陳列 おん祭と春日信仰 (1/2～1/21)       | 特別陳列 お水取り (2/10～3/18) |     |
| 西 新 館 | 展示ケース改修のため、閉鎖(～4/6)            |                       |     |



## 展示評

### 「特別展 北村昭斎―漆の技―」

藪中 五百樹  
(興福寺境内管理室長)



四季を通して観光客の絶えない奈良公園だが、八月の夏休みと十月からの修学旅行シーズンの谷間にあたる九月は閑散とするのが、例年だった。だが昨年は違った。その賑わいに九月二日～十月一日まで、博物館で開催された人間国宝で選定保存技術保持者でもある北村昭斎さんの特別展が、

一役かったことは疑いない。

訪れた人たちの「目の覚める思い…息をのむ思い」「思わず涙がこぼれた」「モダンなのに和、古風なのにきつちり現代」「想像していたより大きかった」「押し付けがましくなかった」「いい仕事ですね」「一人の人間がこれだけ多彩な仕事が出来なのか」などの声に交じって、特に若者から「超かっこいい」「美しいのはもちろんのこと、かっこいい」「モダンでかっこよかった」と、国立博物館の展覧会の感想とは思えないような声が聞こえてきた。

私にはこの「かっこいい」の意味を理解することはできなかったが、学生に聞くと「センスがいい」「イカしている」「とても魅力的」を意味すると言う。そうであるなら、美術品に接する機会の多い私の感想と共通する。

このかっこよさを最大限に演出したのが、博物館の粋

なはからだった。

「正倉院宝物にまなぶ」にはじまって「試みのとき―初期習作時代―」「黒と白の輝き」「アトリエの窓から」「野辺の譜」「古典作品に魅かれて」「螺鈿の多彩な輝き」「器形をもとめて」「漆を家業とする家に生まれて―久齋と大通―」「蘇った鮮やかさ―復元模造―」「制作者の眼で修理する―保存修理―」「最近の大作―へと導いた展示は見事だった。

伝統ある奈良の地で、祖父の代からの漆芸の家に育ち、命を削るようにして生み出した作品群。その作家が意図した美を最大限引き出すとする努力が、展示室全体からひしひしと感じられた。そこからは作家自身も気づかなかった美を見出したに違いない。このような作家と博物館との協調が共感を呼び、多くの人を博物館に引き寄せ、それが先にあげた評価につながるようになった。

漆黒のイメージの強い漆器だが、明るく、色彩豊かな作品が多いから、小品であっても実物以上に大きく見える。したがって博物館の東新館展示室の広い会場が狭く感じられた。

今日もなお意欲的に制作をすすめておられる作家ご本人が、毎日のように会場に顔を見せ、観覧者の質問に丁寧に答え、図録にサインされたことは、従来の博物館にはなかった作家の顔が見えた。そのことが作品を理解する上に大いに役立った。

最後に、瓦研究者の立場から「群雀螺鈿手箱」と蒔絵螺鈿棚「雀喜飛遊」に見られる大胆な屋根の構図や、飛んだり羽根を休める雀の配置は言わずもがな、屋根瓦をグラデーション豊かな黒蝶貝で表現した、その観察力に驚かされたことを付け加えさせていただく。

望むらくは、展覧会を奈良だけではなく、東京、さらに世界に向けて発信する機会を作り、加えて後継者の育成を望むのは、私一人だろうか。

## ●公開講座●

### ●特別陳列 おん祭と春日信仰の美術

1月13日(土)「春日信仰の美術」

清水 健(当館学芸課研究員)

※午後1時30分～3時、当館講堂。聴講無料。

開場午後1時。1時より講堂入口で整理券を配布します。定員200名。

## ●サンデー・トーク●

1月21日(日)「文化財よもやま話」

湯山 賢一(当館館長)

2月18日(日)「お水取り」

西山 厚(当館教育室長)

3月18日(日)「大観音と小観音」

稲本 泰生(当館企画室長)

※いずれも、午後2時～3時、当館講堂。開場午後1時30分。聴講無料。

### ●奈良国立博物館賛助会員

2006年12月末現在、個人会員20名、団体会員10団体、特別賛助会員4団体のご登録を頂いております。

新規会員となられた方のご芳名をあげさせていただきます。

【個人会員】 細呂木 千鶴子 様

【団体会員】 株式会社 鶴屋吉信 様

\*賛助会員に関するお問い合わせは、奈良国立博物館 渉外課 賛助会員担当まで。

### ◆割引制度・無料観覧日のお知らせ

〈子どもとついで割引〉

子ども(中学生以下)と一緒に平常展を観覧される方

〈レイト割引〉

冬休み(12月・1月)及び夏休み(7月・8月)の期間で、開館時間延長日の午後5時以降に、平常展を観覧される方  
以上いずれも平常展観覧料金が、一般400円、高校・大学生200円となります。

〈無料観覧日〉

「こどもの日」・「敬老の日」・「節分の日」(2007年は2月3日)・「国際博物館の日」(5月18日)・「関西文化の日」(11月中の指定日)  
平常展が無料で観覧できます。

### ◆キャンパスメンバーズ

奈良国立博物館は、大学等と連携を図り、博物館が所蔵する文化財を核として文化や歴史を共に学ぶ場を提供する「キャンパスメンバーズ」の制度を設けております。

会員大学等の学生および引率教職員は平常展については無料、特別展については団体料金で観覧できます。(学生証及び引率教職員は身分証明書の提示をお願いいたします。)

なお、現在、加入いただいている大学は次のとおりです。

奈良教育大学 帝塚山大学(帝塚山高校含む) 奈良女子大学 龍谷大学  
京都嵯峨芸術大学 大阪教育大学 京都精華大学 京都橘大学 京都大学  
近畿大学文学部 奈良産業大学 奈良文化女子短期大学付属高等学校  
奈良学園高等学校 奈良佐保短期大学

\*キャンパスメンバーズに関するお問い合わせは、奈良国立博物館 渉外課 キャンパスメンバーズ担当まで。



## 伝大黒天立像

奈良国立博物館  
木造彩色  
高56.3cm  
鎌倉時代(13世紀)  
本館(第13室)展示中



この像は、長らく異形の  
大黒天像とされ、「走り大  
黒」の名で親しまれてきた。  
当館ミュージアムグッズで  
も人気の、手足を大きく前  
後に出して疾駆する姿は、  
見る者に忘れがたい印象  
をのこす。しかしながら最近、  
本像が実は大黒天ではな  
く、寺院伽藍を守護する  
伽藍神中の、「感応使者」  
に当たるといふ有力な新

説が現れた。

伽藍神には道教の諸尊が仏教に取り込まれたものが多く、宋  
時代の中国の影響を受けて、わが国でも鎌倉時代以降、禪刹と  
泉涌寺系の律宗寺院を中心にしばしば造立された。国内最古  
の作例である鎌倉・建長寺伽藍神像(五体)中の感応使者は、  
直立に近い体勢で歩行する姿だが、京都・東福寺には本像と形  
式が酷似する像が存在し、新説は定説化しつつある。頭巾をか  
ぶり、袍と袴を着用する点は中世の大黒天と同じだが、体型が  
比較的スリムで、財宝の袋を持たない点は決定的に違っている。

「福を探して(あるいは運んで)大忙し」といった、微笑ましくも  
有難いイメージが定着していただけに、本像が大黒さまではな  
かったと聞いて、がっかりされる方も多からう。とはいえ、彫像として  
の価値が変わることはない。生彩に富む面貌の描写や着衣の  
巧みな風動表現には、いかにも鎌倉彫刻らしい潑刺とした感覚  
が認められる。尊名にこだわることなく、躍動する身体に周囲に  
生み出される大きな空間を、改めて感じ取っていただければ幸  
いである。

稲本泰生(当館企画室長)

## 平常展の みどころ

## 蒜頭壺

奈良国立博物館(坂本コレクション)  
青銅鑄製  
高26.4cm  
中国・秦～前漢時代(紀元前3～1世紀)  
本館(第15室)展示中

注ぎ口が大蒜<sup>にんにく</sup>の形をしている  
から蒜頭壺の名がある。本当に  
大蒜を模したのかどうか確証はな  
いが、下膨れの胴部をもち頸部を  
細長く直立させるのが一般的(写  
真下)。殷周時代(紀元前8世紀  
以前)の厳めしい装飾過多な青  
銅器と違い、戦国時代後期から秦・  
漢代(紀元前5世紀以降)の青銅  
器はシンプルで実用性の高いものが多く、  
中には持ち主の好みか、うなだれ壺のような  
茶目つ気のあるものまで登場する(写真上)。

蒜頭壺は主に渭水流域(甘肅省から陝  
西省の一部)に発達した酒器で、秦の統一  
と共に全土に広がっている。初現は陝西省  
鳳翔高莊1号墓の副葬品で、戦国時代前  
～中期の頃(紀元前5世紀)と言われている。

ところで、食用のニンニクは中央アジアに起源があり、中国に  
は漢の高祖の時代に張騫<sup>ちやうけん</sup>が西域から持ち帰った(紀元前121年)  
のが始まりと『本草綱目』にある。ニンニクを栽培した経験のある  
方は少ないと思うが、八百屋で売っているのは地下の球根で、こ  
れが地上に茎を伸ばして花芽を付ける。この花芽が球根そっくり  
で、その重みでうなだれることもある。この壺のうなだれ方はもし  
かして…と思うがいかなものか。つまり、ニンニクを写した壺な  
らば、張騫が西域から持ち帰るよりも300年も前に中国内で栽培  
されていた証拠になる。とりわけ西域に近い地方に発達したもの  
の由あつてのことか。薬膳酒のイメージにもよいではないか。

真偽はともかく、疲れたおじ様方の話題作りにはお薦めの壺  
…かしら?

吉澤 悟(当館資料室長)



蒜頭壺(高34.5cm)  
坂本コレクション

### 開館予定(1月～3月)

#### ■開館時間

午前9時30分～午後5時(1月7日(日)、  
2月3日(土)、3月12日(月)は午後7時まで)  
※いずれも入館は閉館の30分前まで

#### ■休館日

月曜日(ただし1月8日、2月12日、3月5日  
3月12日は開館し、1月9日(火)、2月13日(火)  
は休館)

※新年は1月2日(火)より開館いたします。

### 観覧料金

#### 平常展・特別陳列

|     | 大 人  | 高校・大学生 | 中学生以下 |
|-----|------|--------|-------|
| 一 般 | 500円 | 250円   | 無料    |
| 団 体 | 400円 | 200円   |       |

\*団体は責任者が引率する20名以上。

\*70歳以上の方は無料。  
(入館の際に年齢のわかるものをお示しください。)

\*障害者の方と介護者(同人数)は無料。  
(入館の際に障害者手帳をお示し下さい。)



(交通案内) 近鉄奈良駅下車徒歩15分、またはJR奈良  
駅・近鉄奈良駅から奈良交通「市内循環」バス「氷室神  
社・国立博物館」下車

※当館には駐車スペースがございませんので最寄りの県営駐車場等(有料)をご利用下さい。

 **奈良国立博物館**  
Nara National Museum

『奈良国立博物館だより』は、1・4・7・10月に発行します。郵送をご  
希望の方は、何月号かを明記し、返信用封筒(90円切手貼付、宛名明  
記)を同封して、当館の情報サービス室にお申し込みください。